

## 私の 1 枚、私の一言

福田 明則 (全国グアム島戦友会)

この写真の裏側には「向かって左から 地京一等兵、辻本班長、福田上等兵、吉林 興山スキー場にて、昭和 18 年」とある。遼陽の部隊での雪中訓練の演習であろう。

兄 福田則之は三男で、5 人の男兄弟は全部陸海軍に差し出した熊本県の当時で言えば普通の家でした。兄は昭和 16 年頃から国策による「大陸進出」に応じ満鉄に転職、大連で機関士として修行中であった。私は万里の長城の西の張家口郵電局の 17 歳の無線員であったが、兄から「近く入営する」という知らせがあった。休暇を取って大連に向かいました。大連の大山隊舎という独身寮の一室で一夜、語り明かした。

### 大連の一片の昆布

翌日「星が浦海水浴場」へ行った。夏には賑やかな海水浴場だったが秋口のその時は人の気配も少ない浜だった。波打ち際には何処から流れてきたのか大きな昆布の束が沢山打ち上げられていた。もしかしたら内地から流れてきたのではとの思いがあってその一片をポケットにしおいて兄に別れを告げた。その切れ端は六十数年経た今も私のアルバムの隅に眠っている。思い出の昆布なのだ。

あの大連での一夜が兄との今生の別れであった。

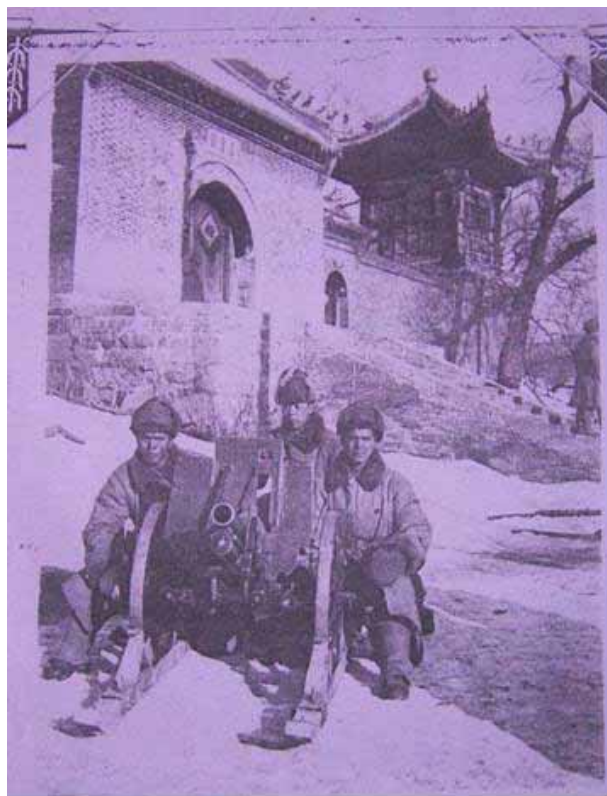
23 歳の兄は伴侶になる人にもめぐり合うこともなく、独り身のまま国難に殉じて私たちの影の支えとなった。昭和元祿、平成の安穏な日々にも恵まれることもなかった。

兄の御霊にただ頭を下げるばかりである。

### 兄の戦死

兄がグアム島で戦死したとの広報が舞い込んだのは敗戦の混乱が始まった昭和 20 年の秋のことであった。父母を始め家族は悲嘆にくれて悲しんだが遺品もなく、紙切れが一枚入っているだけの遺骨箱が渡されただけだった。

数年後、復員局に赴き調べた結果は、現地の



部隊名 第 38 連隊第 2 大隊、山砲隊(高縄隊)であることが判った。グアム島に展開した 38 連隊の遺跡らしいと思しき場所もわかったので、昭和 49 年グアム島戦友会の慰霊団に参加し、アガットの町を通り昭和湾のバンギー岬近くのアリファ山(有羽山)の棚田状の山肌に線香を供え、手を合わせ、懇ろに兄の冥福を祈った。

### グアム島慰霊の詠草

我が兄の いまはの際も 昭和湾の  
夕日は波に 砕け散りしか  
歩兵第三十八連隊第二大隊  
終焉の地なるか アリファ(有羽)山は  
マリアナの 海に燃え入る 夕日背に  
兄果てしとふ 山登り行く  
わが母の 手向けの花ぞ ふるさとの  
流れの酒ぞ 兄よ応えよ  
(東京都江東区亀戸 福田明則)